

## 異文化コミュニケーション教育の現状と課題(1)

～授業実践の点検を通して～

杉本千恵

Chie SUGIMOTO : The Present Situation and Future Perspectives on Teaching  
Intercultural Communication (1) —Classroom Analysis—

本稿では、異文化コミュニケーション関連の授業のあり方について、事前授業と実践的な交流活動とのつながりの重要性、交流活動といった体験型授業を導入する際の意義と留意点などについて、筆者の実際の授業実践内容と受講学生に実施したアンケートの結果を考察することによっての検討を試みた。また、授業実践の点検を通して見えてきた今後の異文化コミュニケーション教育の課題について若干の整理を行なった。

キーワード：異文化コミュニケーション教育 交流活動 理論と実践

### はじめに

異文化コミュニケーション研究は、日本においてはまだ新しい分野であり、研究領域に関しても、心理学、文化人類学、コミュニケーション学、教育学等にまたがった学際的なものである<sup>1)</sup>。研究内容・方法ともに発展途上中といえる分野であるが、人と人との「文化を超えた」交流が日常化しはじめている日本において、異文化コミュニケーション研究、また、異文化コミュニケーション教育の必要性が認められつつある。

1990年代頃より、日本での異文化コミュニケーション研究は多角的なアプローチで活発に行われるようになり<sup>2)</sup>、その教育法に関する研究も、主に実践報告などの形で見られるようになっていく。

筆者は、本短大に勤務して以来8年間、「異文化コミュニケーション」関連科目を担当している。この分野についての研究と教育法についての学習を並行してすすめながら取り組んできた。

本稿では、異文化コミュニケーション教育の現状と課題について、一地方短大での実践を通じて整理し、より効果的な異文化コミュニケーション教育のあり方を検討することを目指したい。

第1稿となる今回は、実際に筆者が担当している異文化コミュニケーション関連の授業内容についての点検を行い、その課題の抽出を試みる。

### 1. 交流活動を実施するうえでの効果的な事前授業の検討

鳥取短期大学国際文化交流学科の平成15年度入学生の教育課程においては、「異文化コミュニケーション」「異文化交流」の二つの異文化コミュニケーション系科目（いずれも必修）が設置されている。

1年前期の講義科目「異文化コミュニケーション」では、「文化とは何か」「コミュニケーションの種類」「ことばと文化の関わり」など、異文化コミュニケーションの基本概念を講義を中心に、必要に応じてペアワークやグループ演習を交えて学習する。

1年後期の演習科目「異文化交流」では、授業の一環として異文化圏の人と実際に交流活動を行う1泊2日の学外演習を設け、異文化交流に必要な姿勢を学ぶことをねらいとしている。

言うなれば、前期の「異文化コミュニケーション」を理論編とすると、後期の「異文化交流」が実践編となるわけである。

異文化コミュニケーション授業において、いかに効果的に従来の知識型学習活動と体験学習型活動を組み合わせ導入していくかは課題の一つとされている<sup>3)</sup>。

平成12年度に国際文化交流学科が新設されて以降、この2つの科目を同様の開講時期・形態で実施してきた。「異文化交流」での異文化圏の人との交流活動（以下、交流活動とする）は、講義科目である「異文化コミュニケーション」での学修内容

を体感的に理解できる絶好の機会となる。また、限られた時間と設定の中で行われる交流活動をいかに有意義かつ深まったものとするかは、事前授業のプランニングに寄る部分が大いといえる。そこで本節では、交流活動と事前講義・事前授業のつながり、及びバランスなどについての点検を試みる。

#### (1) 「異文化交流」学外演習の概要

平成15年度の学外演習は、11月29日（土）～30日（日）の日程で、鳥取県立農業大学校国際農業交流館において実施した。参加者は、授業の受講者国際文化交流学科1年生41名（中国人留学生1名を含む）、運営スタッフ、ファシリテーターとして参加した「異文化交流」既受講学生2名（2年生1名、専攻科1年生1名）、授業担当教員2名、異文化圏参加者10名であった。10名の異文化圏参加者の、出

（資料1）

#### 《学外演習・交流プログラムの概要》

##### ■交流プログラム①「Various Cultures」(様々な文化)

ねらい ◎イメージやステレオタイプの異文化解釈でなく、活きた深みのある文化理解を目指す

◎自分の関心のあるテーマについての文化比較および考察を行う

- (1) 異文化圏参加者に、事前に調べておいた、その人の出身国の情報について紹介し、その情報が正しいかどうかを検証し、さらに詳しい話をきく。
- (2) 自分の関心のあるテーマについて、複数の異文化圏参加者に、それぞれの国での事情を尋ね、比較してみる。
- (3) 上記のことを尋ねる際、必ず、その話題について、日本や自分の情報を伝える。

##### ■交流プログラム②「What's this?」(これは何でしょう?)

ねらい ◎自分たちの文化では、なじみあるものも、異文化圏の人にはそうとは限らないことを知る

◎日常的な日本文化の存在に着目し、その文化について深く調べてみる

◎異文化圏の人にわかりやすいコミュニケーション（言語・非言語）を工夫する

- (1) 日常生活で用いている物で、異文化圏の人がその用途や詳しい情報を知らないと思われるアイテムを1人1点持参し、紹介する。
- (2) 異文化圏参加者に質問してもらう。（質問は事前に予測し、その解説も準備しておく。）
- (3) 異文化圏参加者にも、同様にアイテムを持参してもらい、紹介してもらう。

##### ■交流プログラム③「Critical Incidents」(クリティカル・インシデンツ)

ねらい ◎異なる文化・コミュニケーションスタイル・価値観の人とのあいだには、コミュニケーションギャップや理解しあえない出来事が起き得ることを認識する。

◎その出来事が起きた原因および解決法を探り、異文化理解のための姿勢について考える。

##### 《前半：グループ活動》

- (1) グループに別れ（異文化圏の人を含む）、それぞれのこれまでのコミュニケーション・ギャップ体験やカルチャーショック体験について話す。
- (2) その中から話題を選び、その状況をスキットにまとめ、演じる。

##### 《後半：全体での活動》

- (3) グループ毎にスキットを演じてもらい①問題の所在、②解決法、を全体でディスカッションする。

身国、日本への滞在理由などは、ノルウェー（男、高校交換留学生）、マレーシア（女、高校生）、アメリカ（女、高校生）、インドネシア（女、高校生）、韓国（男、国際交流員）、イギリス（男、ALT）、アメリカ2名（男、女、ALT）、パラグアイ（女、主婦）、ニュージーランド（男、主夫）であった。異文化圏参加者には、事前に交流プログラムの内容を伝え、プログラムに参加してもらうための準備を依頼し、「ゲスト」というよりは、学生と同様に異文化交流を体験する「参加者」という位置付けである。また、性別、年齢、出身国・地域、日本での滞在年数、日本語の運用能力などについては、可能な限りバラエティに富んだ構成メンバーとなるよう調整を試みた。

平成15年度に実施した交流プログラムのねらいと実施の要領は資料1の通りである。初日の午前中に

プログラム1, 午後に2, 3を実施した。

## (2) 前期講義および異文化交流事前授業の概要

平成15年度は、理論と実践の融合を意図し、前期の「異文化コミュニケーション」の授業時において、進度・内容は例年と同様に行なったが、後期の「異文化研修」での交流プログラムの実践につながる箇所については、そのことを意識しながら教授した。実際の交流プログラムに関連した講義、事前授業での演習内容を表にすると資料2のようになる。

例えば、「文化と認識」ということに関して講義を行なった際に、「杓文字」「徳利」を持参し、自分たちの文化圏では日常的に用いている物も、その存在を見たこともない人、用途を知らない人が存在し得ることを解説し、さらに、そういった人にわかるようにそのアイテムを紹介してみるという演習を行なった。この授業内容は、交流活動時の交流プログラム2（日本文化紹介）に通じるものと意識した。事前授業に入ってから、実際に学生各自がアイテムを持参し、グループの仲間が異文化圏参加者の役となり、各自のアイテム紹介に対して様々な質問をしたりなどして、実際の交流活動時に向けて、紹介内容・方法をより工夫するという演習活動を行なった。

また「高コンテクスト文化・低コンテクスト文化<sup>4)</sup>」について説明する際、その文化の違いがコミュニケーションギャップを生むケースがあることを、交流プログラム3「クリティカル・インシデンツ」で扱うような具体的な例を挙げて解説した。また、前期授業の終了時には、学生にこれまでの個々の体験からコンテクストの違いによる誤解やコミュニ

(資料2)  
《事前講義・事前授業の関連》

交流プログラム	前期授業「異文化コミュニケーション」	「異文化交流」事前授業
1. Various Cultures	①ステレオタイプ (講義) ②文化の多様性 (講義) ③クラスメートリサーチ ペアで、互いの共通の文化・異なる文化を探しあう	①「脱イメージ」リサーチ 異文化圏参加者の出身国のイメージとその検証 ②「マイテーマ」リサーチ 自分の関心テーマについての各国事情の調査
2. What's this ?	①文化と認識 (講義) (杓文字・徳利/色彩など) ②コミュニケーションの種類 (言語・非言語) (講義) ③非言語コミュニケーション リサーチ	①アイテム紹介プレゼンテーション ②グループでの意見交換 (プレゼンの改善点と質問の予測) ※相手はそのアイテムを全く知らない想定 ※言語が十分に伝わらないケースがあることも想定
3. Critical Incidents	①高コンテクスト文化・低コンテクスト文化 (講義) ②価値観と文化 (講義・リサーチ) ③言語・非言語コミュニケーションの文化による違い (講義) ④カルチャーショック (講義) ⑤映画「Mr. ベースボール」鑑賞とディスカッション ⑥「マイカルチャーショック」と題してのレポートの作成	①あるコミュニケーションギャップに関する出来事についてグループ毎にスキットを作成し発表 ②DIE法を用いての分析 ③解決法についてのディスカッション

ケーションギャップが生じた体験、「カルチャーショック」に相当する体験をレポートにまとめてもらい、交流活動時にそういった体験を議論する機会があることを紹介した。

後期に入ってから事前授業（全7回）では、主に3つの交流プログラムに関連する演習活動を行なった。事前授業で課したタスクに対し、真摯に取り組むことにより、実際の交流活動時に向けての準備が整うようなプランとした。

## (3) 授業実践内容についての考察

本短大での異文化コミュニケーション関連授業は、1年前期・後期と通年にわたる必修科目であり、受講学生の人数も適当で、他大学との状況と比べても理想的な実施形態といえるであろう。特に事

前講義・演習の延長上に、実践活動として、宿泊を伴う形で実際に異文化圏の人との交流活動を行なう学外演習を実施している点は、次節で述べるとおりその意義は大きいといえる。

ただ、体験型の学習活動は学習者の情意面・行動面の変容を促すため、学習者の防御的あるいは否定的態度を引き起こしかねないので入念な計画と準備が必要であるとされる<sup>5)</sup>。例えば、授業時における参加者の関与についてBrislinは、まず関与度の低い活動からはじめ段階的に関与度を増していき、最終的に実地での体験活動を導入するといった実施方法が望ましいとしている<sup>6)</sup>。そのためにも、今後の授業の構成を検討する際においても、より講義と演習のバランス、実際の体験学習へ移行するまでの授業展開、参加者の関与度などに配慮していく必要がある。

## 2. 学外演習の内容と効果についての検討

実際の異文化圏の人との交流活動を通して“異文化交流に必要な姿勢”を個々の学生が学びとっていることは、学外演習後のレポートにも如実に表れるし、その後の学生の姿勢や態度の変化からも見て取ることができる。しかし、学外演習での体験が実際に学生にもたらしている影響、交流体験を経ての学生の心的変化などをより具体的に把握したいと考え、平成15年度については、学外演習終了後に学生へアンケートを実施した。本節では、その結果の整理と考察を行なう。

### (1) アンケートの実施についての概要

学外演習終了次週の授業時に、異文化コミュニケーション関連の授業全体及び学外演習の内容に関して、また学外演習を体験しての現時点での心境について、筆者が設定した13項目の設問について「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の4段階を選択する形で回答してもらった。最後に自由記述欄を設け、授

業を通して感じたことを自由に記述してもらった。学外演習参加学生全員の41名から回収した。

### (2) アンケート結果

4段階評価によるアンケートの結果は、資料3の通りである（アンケートの内容・項目については付録として最終ページに付した）。ここではアンケートの項目を幾つかの要素に分け、それぞれの結果の特徴を、自由記述内容を引用しつつ整理する。

#### 1) 事前講義・事前授業の有効性

前述したとおり、筆者が授業時に意識して取り組んだ事前授業が、実際の交流活動に貢献したのかについて学生の印象を尋ねた。『a. 前期の「異文化コミュニケーション」の講義は学外演習の役に立った』『b. 学外演習までの事前授業は当日の演習の役に立った』かどうかについて、少なからずの学生が、「役に立った」としている。特に「前もって相手の文化を調べておくと、そのぶん相手とぐーっと近づけることを実感した」「相手のことについて事前に知っておくことがコミュニケーションをより深めることがわかった」など事前授業で交流プログラム1の準備をした点についての有効性に関するコメントが複数あった。

#### 2) 交流の楽しさ、異文化圏の人への親しみ

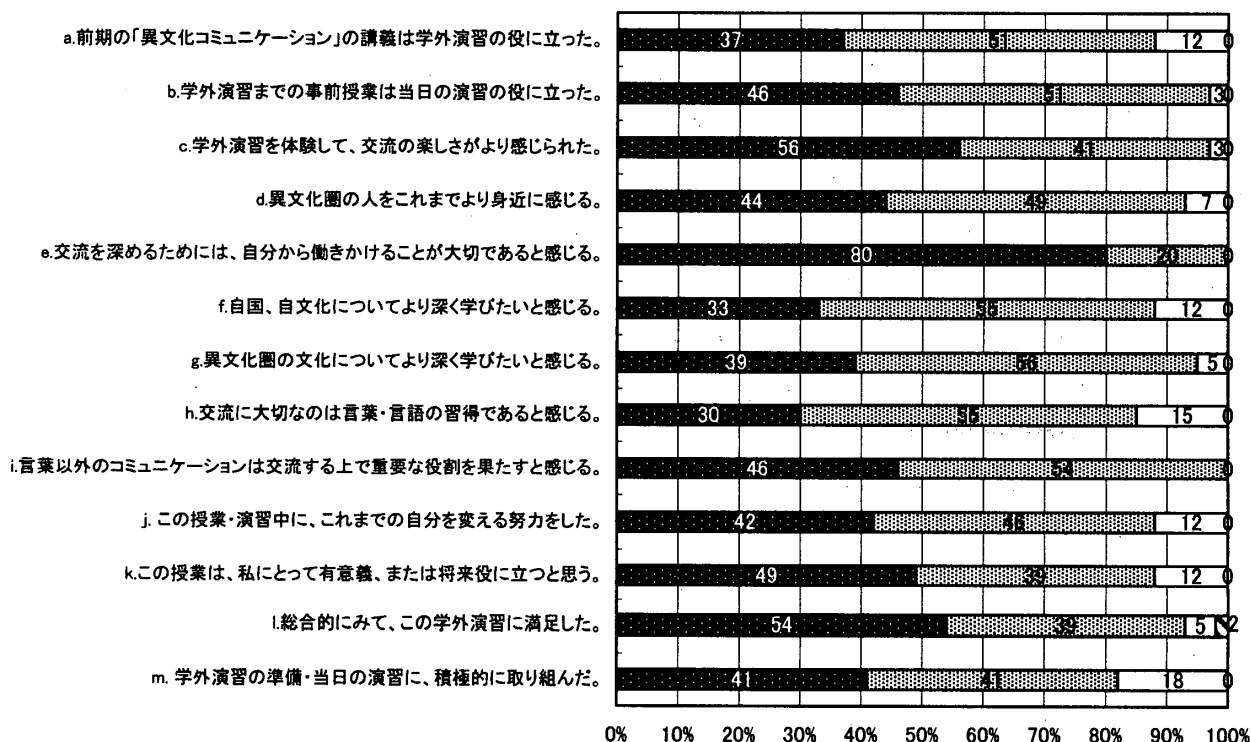
学外演習の特色から、学生の感想として挙がってくると思われた、交流の楽しさの実感、異文化圏の人への親しみ、について『c. 学外演習を体験して、交流の楽しさがより感じられた』『d. 異文化圏の人をこれまでより身近に感じる』という2項目を尋ねた。予想通り「文化が違う人と交流しいろいろ発見することができた」「外国の人に対する壁がなくなった」などポジティブな記述が多く見られた。一方で「日本語が通じない人には思いを伝えられないと思いきなり話しかけることができなかつた」といったもう少し距離を縮めたかつたがかなわなかつたというコメントもあった。

#### 3) 自分からの働きかけ

質問した項目の中で、最も「とてもそう思う」を

(資料3)

「異文化交流」学外演習に関するアンケート



■とてもそう思う □ややそう思う □あまりそう思わない □全くそう思わない

選択した学生が多かったのが、『e. 交流を深めるためには、自分から働きかけることが大切であると感じる』であった。「とてもそう思う」80% (33名), 「ややそう思う」20% (8名)であった。「自分から勇気を出して行動することで、より相手のことを理解できたしより楽しむことができた」「留学生の態度や姿勢をみてもっと自分の思っていることは発言するべきだと思った」など、自分から能動的に働きかけることが交流の鍵であること、自分から働きかけた結果交流を楽しむことができた、という実感を述べている記述が多かった。

#### 4) 自文化と異文化についての知識

学外演習を通して、異文化への学びへの興味、一方で、自文化を語りたいという自国・自文化への学びへの興味がどのように変化したのかを知りたいと考え、以下の項目を尋ねた。『f. 自国・自文化についてより深く学びたいと感じる』、『g. 異文化圏の文化についてより深く学びたいと感じる』

「自分たちの文化についても知っているようで知

らないことが多くあり、今よりも日本文化を深く学んでいきたいと思った」「他の国の持つ独自の文化や他の国の人から見た日本文化の不思議だと思われる部分がわかった。前よりも自分から知りたいと思うことが増えた」などの記述があった。

また、f. g. の両方の項目について共に「とてもそう思う」と答えた学生が12名 (29%) あった。ある学生のコメントには「相手の文化をより理解することが相手を知ること、自分の文化を伝えることが自分を伝えることになるのだと感じられた」とあった。

#### 5) 言語・非言語コミュニケーションの重要性

学外演習での交流活動では、日本語・英語などの言語の使用は、学生の自由意志に任せている。実際の交流場面では、辞書を片手に話す者やジェスチャーを交えて奮闘する学生、日本語の表現をわかりやすく言い直すなどの姿が見られる。また、異文化圏参加者の日本語の運用能力、日本文化や習慣に対する理解度は様々であったため、学生たちは、相

手とのコミュニケーションの場面において、色々な体験をしたようである。

言語・非言語コミュニケーションの有効性、重要性について以下のような設問で尋ねた。『h. 交流に大切なのは言葉・言語の習得であると感じる』

『i. 言葉以外のコミュニケーションが交流する上で重要な役割を果たすと感じる』

言語コミュニケーションの重要性については、「英語で話して相手に伝わり共感できたら楽しいと思った」「なんだかんだいっても言葉は必要だと感じた」「英語だけでなく他の言語にも興味を持った」など、言語・語学学習への意欲を持つきっかけとなったと思われるコメントが多かった。

一方、「言葉以外のコミュニケーションは大事だと思った」「言葉が通じないからとものおじすることはない」といった、非言語コミュニケーションの有効性を感じた学生も多かったようである。

言語・非言語コミュニケーションの重要度については、両方の設問に対し同段階（h. i. 共に「とてもそう思う」または「ややそう思う」）を記した学生が20名（49%）、非言語コミュニケーションをより重要と考えた（設問iについてhよりも段階を上位に回答したもの）のが17名（41%）、言語コミュニケーションをより重要と考えた（hについてiよりも段階を上位に回答したもの）回答が3名（7%）であった。この結果から見ると、総じて、交流活動体験からは、言葉でのコミュニケーション以上に、非言語コミュニケーションの重要性を認識した学生が多かったといえる。

#### 6) 自分の変化

『j. この授業・演習中に、これまでの自分を変える努力をした』という質問を行なったが、「とてもそう思う」「ややそう思う」と9割近くの学生がイエスと答えていた。大半の学生にとって、こういった異文化圏の人との交流活動ははじめての体験であり、学外演習の何らかの場面で、これまでの自分の行動や考え方を考える努力を体験したようである。その結果、「人の目を見て話せるようになった」

「引っ込み思案なところがあったが積極的になれた」「前と比べると異文化に飛び込めるようになった」「今まではいつも仲間と一緒にないといけなかったが、一人でも行動できることがわかった」など、学外演習での活動が、自分のこれまでの殻を破ったり、変化を生じさせるきっかけになったというコメントが目立った。

#### 7) 授業の有意義性、満足度、授業への取り組み

この授業が、将来役に立つかどうか、授業の総合満足度、などについては、『k. この授業は、私にとって有意義、または将来役に立つと思う』『l. 総合的にみて、この学外演習に満足した』『m. 学外演習の準備・当日の演習に、積極的に取り組んだ』の3項目を尋ねた。k. l. について、「とてもそう思う」がそれぞれ半数近くおり、総じて肯定的な評価が得られたと言ってよいであろう。

#### (3) アンケート実施方法についての考察

このアンケート調査は、学外演習という体験活動までの一連の異文化コミュニケーション関連授業の教育的効果と、学生の心的変化について、具体的な把握を試みようとして計画・実施したものである。実際、この目的で応用可能な先行例がなかったために、独自にアンケートを作成することとなった。

しかし、設問内容の多くが、学外演習に関連するものであり、またアンケート実施時期も、学外演習終了直後であったため、実質的には、学外演習による心的変化の考察材料となった。

前節で見えてきた限りでは、学外演習が参加学生に異文化に対する意識の変化や交流についての姿勢について、明らかに影響を与えていることがわかる。一方で、個々の学生が感じた要素についてはかなりの個人差が見られる部分もある。今後、学外演習の効果をより厳密に検討するのであれば、外国語学習への態度や異文化接触の体験差など、個々の学生の属性を明らかにしたうえで、その効果と留意点を検討する必要があるだろう。

また、筆者が取り組みたいと考えている一連の授

業全体の教育的効果を検討できる調査の実施方法について、さらに研究をすすめて導入を試みたい<sup>7)</sup>。そのためには、異文化コミュニケーション関連の授業を受講する前の学生と、授業受講後の学生について授業前・後に調査を実施し、比較検討するといった形が適切であろう。

また、平成15年度についてはアンケート及び調査の対象者として、授業の受講者学生にのみアンケートを実施したが、異文化圏参加者に対しても同様に調査を行い、両者の受け止め方に違いがないかなどについての分析や、日本人学生および異文化圏参加者の両者にとってより充実した交流活動の内容を検討することもできよう。

### 3. 授業点検結果からみる今後の課題

最後に、これまで見てきた授業点検を通して指摘できる今後の課題について述べたいと思う。

一つには、異文化コミュニケーション授業においては、理論と実践のよりバランスのとれた効果的な盛り込み方が検討されていくべき点である。本稿では、授業の一環に実施する交流活動とそれに及ぶまでの事前授業の中での理論と実践の関わり、事前授業の効果などについて検討したわけであるが、これらの授業で得た知識や技能、姿勢は、特別に設定された交流の機会に限らず、学生が今後様々な場面で人と関わっていく実生活の中で、活かされていくことが重要だと考える。

また、交流活動という体験型の活動を導入していく場合には、これまで以上に慎重かつ綿密に授業の内容についての検討が必要であるといえる。体験学習導入には、個々の学生の資質などにも目を配り、その進め方に十分に配慮が必要である。アンケートの授業満足度に関する設問に関して「まったくそう思わない」と答えていた学生が1名いたが、その記述には、「緊張してなかなか話せずつらかった<sup>8)</sup>」とあった。実際の交流活動の前に受講学生同士が互いを知る機会を十分に与えて人間関係を築く、あるいは

交流を不得手とする学生が安心して参加できる担当教員との関係づくり、といった環境作りに時間を割く必要があるとされる<sup>9)</sup>。

国際文化交流学科では平成16年度入学生より1年前期に「交流入門」という必修授業が設けられた。この授業にこういった環境づくりの部分を期待することができよう。

最後に、本稿では学外授業の事後授業や実際に異文化圏に赴く「異文化研修」などといった他の授業へのつながりなどについて議論することができなかった。体験学習は、体験そのものも重要であるが、自己の体験や感じたことを、その後の場面で活かすことが真のねらいであろう。事後授業との関連の検討については、平成16年度の授業点検も含みつつ、次稿で行いたい。

### おわりに

現代の国際社会で起きている、異文化「不理解」が原因とも言える紛争や衝突が絶えない状況を見るにつけ、新しい時代を担う若い世代に対してのこの学問分野の教育的意義について考えざるをえない。

異文化コミュニケーションは、「何をどのように」教えるかがやっと議論されはじめた新しい教育分野である。今後、新しい教育方法論や研究に常にアンテナをはり、本短大の学生にとってより魅力的で有意義な授業づくりを心がけたい。

### 注

- 1) 長谷川典子「異文化コミュニケーション教育へのアプローチ—2つの体験学習を通して—」『英学平安女学院短期大学英学会』第26号、1994年、11ページ。
- 2) アメリカにおける異文化コミュニケーション教育の展開、及び1990年代以降の日本での異文化コミュニケーション教育の現状については、町恵理子「日本における異文化コミュニケーション教育—現状と課題—」『麗澤レビュー』第3巻1997年

- 5月, 96-104ページ, を参照されたい.
- 3) 町恵理子「異文化コミュニケーション授業時における体験学習導入の留意点」『麗澤レビュー』第8巻2002年5月, 41ページ.
  - 4) 「異文化コミュニケーション (intercultural communication)」という言葉をその著書 *The Silent Language* ではじめて使ったとされるアメリカの文化人類学者のE.T. Hallによって紹介された概念. コミュニケーションにおいてコンテキストに依存する部分が高い文化を高コンテキスト文化とし, 日本は高コンテキスト文化に属すると説明される. 一方, コミュニケーションにおいて言語情報に依存する部分が多い文化を低コンテキスト文化と呼ぶ. (エドワード・T・ホール『文化を超えて』TBSブリタニカ, 1993年, 102-132ページ.)
  - 5) 町恵理子「異文化コミュニケーション授業時における体験学習導入の留意点」『麗澤レビュー』第8巻2002年5月, 42-43ページ.
  - 6) Brislin, R.W. Intercultural communication training in M.K. Asante and W.B. Gudykunst (Eds.), *Handbook of international and intercultural communication*, Newbury Park 1989, pp. 441-457.
  - 7) 具体的には, M. Bennetの「異文化感受性発達尺度 (The Intercultural Development Inventory, IDI)」やDavid Matsumotoの「国際適応力 (Intercultural Adjustment Potential Scale, ICAPS)」などの尺度が, 体験授業を含む異文化コミュニケーション教育の効果を測ることに応用できないかを検討していきたいと考える.
  - 8) ただし, この学生の自由記述の全文は以下の通りであった. 「緊張してなかなか話せずつらかったけれど, 頑張って話してみたら相手も答えてくれて嬉しかった」
  - 9) 町恵理子「異文化コミュニケーション授業時における体験学習導入の留意点」『麗澤レビュー』第8巻2002年5月, 51ページ.



(付録)

授業アンケート

「異文化交流」学外演習に関するアンケート  
 授業「異文化交流」の事前授業および学外演習を受講・体験して、皆さんがどのようなことを学んだのか、意識や態度に変化が生じたのかを知るためのアンケートです。  
 授業の詳細などにはいっさい関係しませんので、率直に回答してください。

ま く や と  
 さ う ゃ り  
 む ね ち  
 わ ね ち  
 い ね ち

以下の各質問に対して、あなた自身、どの程度当てはまるかを1~4から選んで下さい。

- ★事前授業ほか
- a. 前期の「異文化コミュニケーション」の講義は学外演習の役にたった。 a 1 — 2 — 3 — 4
  - b. 学外演習までの事前授業は当日の演習の役に立った。 b 1 — 2 — 3 — 4
- ★学外演習を体験して
- c. 人との交流の楽しさがより感じられた。 c 1 — 2 — 3 — 4
  - d. 異文化圏の人をこれまでより身近に感じる。 d 1 — 2 — 3 — 4
  - e. 交流を深めるためには、自分から働きかけることが大切であると感じる。 e 1 — 2 — 3 — 4
  - f. 自国、自文化についてより深く学びたいと感じる。 f 1 — 2 — 3 — 4
  - g. 異文化圏の文化について、より深く学びたいと感じる。 g 1 — 2 — 3 — 4
  - h. 交流に大切なのは言葉・言語の習得であると感じる。 h 1 — 2 — 3 — 4
  - i. 言葉以外のコミュニケーションは異文化圏の人と交流する上で役に立つ。 i 1 — 2 — 3 — 4
  - j. この授業・演習中に、これまでの自分を变える努力をした。 j 1 — 2 — 3 — 4
  - k. この授業は、私にとって有意義、または将来役に立つと思う。 k 1 — 2 — 3 — 4
  - l. 総合的にみて、この学外演習の準備・当日は、積極的に取り組んだ。 l 1 — 2 — 3 — 4

★この事前授業・学外演習を体験して、あなたが得られたと思うこと、あなたが変わったと感じることを自由に記述して下さい。

[ ]